

# 東アジア文化交渉学の構築にむけて

藤 田 高 夫

キーワード：文化交渉 東アジア 文化研究

## 1 はじめに ― 文化交渉学教育研究拠点の形成と目的

平成19年度文部科学省グローバルCOEプログラムの拠点選定を受けて、我々は二つの組織を立ち上げた。一つは、平成20年4月より開設される新専攻「文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専修」である。この専攻は、関西大学大学院文学研究科を改組し、従来の総合人文学専攻に並ぶ専攻である。そのなかにグローバルCOEプログラムによる若手研究者の養成を担う「東アジア文化交渉学専修」1専修がおかれ、毎年博士課程前期課程12名・後期課程6名の学生を受け入れ、修了者にはそれぞれ「修士（文化交渉学）」「博士（文化交渉学）」の新学位が与えられる。

もう一つは平成19年10月に正式に発足した「文化交渉学教育研究拠点」である。この組織は、研究活動の実施を主に担い、拠点リーダー以下現在15名の事業推進担当者全員、および拠点形成支援者（客員教授・助教・特別研究員・ポストドクトラルフェロー）が所属する。上記大学院新専攻の博士課程後期課程学生も、すべてリサーチアシスタントとしてこの拠点に任用される。

両組織は、拠点リーダーを中心として事実上一体のもので運営され、その上に学長を議長とする全学的な「グローバルCOE運営協議会」が設置されて、全学的な支援体制のもとで、本拠点のプログラムの運営と進捗管理が行われている。

本拠点の活動目的は、以下の3点に集約される。

### ①東アジア文化研究の新世代の育成

東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体として捉える複眼的視座を共有し、国際的発信力を持つ自立した若手研究者を育成する。

### ②文化交渉学の創生

従来の二国間関係あるいは学問分野別の文化交流研究を越えて、新たな学問分野としての「文化交渉学」を構築し、その理論と方法の創生、具体的事例の検討と体系化を行う。

### ③東アジア文化研究のハブ形成

各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードし、固有の「国際学会」を有する研究ハブを構築する。

以下、この目的を達成するための現段階での具体的構想を紹介する。

## 2 東アジア文化交流研究の現状

本拠点の基盤となったのは、関西大学が東西学術研究所などを中心に長年にわたって遂行してきた「日中関係」を中心とする「文化交流研究」である。本拠点は、その成果を十分にふまえながら、さらにそれを広範囲かつ高度に展開することを目指している。その際に、「文化交流」という比較的なじみのある言葉に代えて、「文化交渉」という言葉を用いるのは、次のような現状認識があるからである。

従来の文化交流研究では、現在の国家を単位とするナショナルな研究枠組が前提となってきた。一例として日中交流史を取り上げてみれば、東アジアにおける本来は多元的な文化交流のなかから、日本と中国の二国を切り出し、当該二国間の文化交流という枠組で研究が行われているのが現状である。さらにそこでは、二国間であっても、個別の研究は日本と中国のナショナルな枠組に拘束されてきた。極論すれば、日本における「日中文化交流史研究」、中国における「中日文化交流史研究」は、それぞれ日本に現れた中国、中国に現れた日本を、考察の対象としてきたのであり、越境的で総合的な研究組織、研究フィールドが形成されているとは言い難い。たとえば17～19世紀の日中文化交流を、中国側が「清朝における中日文化交流」と呼び、日本側が「江戸・明治期の日中文化交流」と呼ぶことになるのは、文化交流史研究が中国史と日本史のそれぞれの枠組のなかで行われてきたことを如実に反映している。

また従来の文化交流研究は、主として個別専門分野ごとの文物や制度に関する事例研究の積み重ねとして形成されてきた。その結果、言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野ごとの知見は、確かに豊かに蓄積されてきた。再び「日中文化交流」を例にとれば、各分野での先行研究はそれだけで一つの叢書を形成できるほどの質と量を備えるにいたっている。しかし、それらの成果はいわば「個別叙史的」な蓄積の増加という側面を有し、日中間に限っても、文化交渉の全体像を把握する方法への省察は、なお未開拓な分野である。それは、同じ事象を対象としながら学問分野を越えての接触を欠き、全体性を失った現代の人文学研究の現状をそのまま反映しているともいえよう。

もっとも、東アジア世界については、ナショナルな枠組を超えた視座として東アジア文明、東アジア文化圏という概念が存在する。しかしこうした文明論・文化圏を無批判に前提とする研究は、その文明・文化の中心となる高度な文明を安易に設定する点で、「文明—未開」「中心—周辺」の図式を脱却していない。そのために、本来は双方向的な文化交渉の本質が把握されず、文化接触の多様な諸相を平板に捉えるにとどまっていると言わざるを得ない。我々のプログラムは、東アジアを研究対象としているが、その際に従来のこのような研究動向に対して十分な批判的検討を加えない場合には、水が高さから低きへ流れるように「中国から周辺諸国家への文化の伝播」という一方通行の理解から免れることができないであろう。

## 3 東アジア文化交渉学のめざすもの

如上のような認識の上に立って、我々が提唱する東アジア文化交渉学を一言で定義すれば、次のようになろう。すなわち東アジア文化交渉学は、国家や民族という分析単位を超えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を想定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容等の諸現象に注目し

つつ、トータルな文化交渉のあり方を、人文学の諸分野を包括した複眼的で総合的な見地から解明しようとする新たな学問研究である。その構築のためには、少なくとも二つの「越境」が意識される必要がある。それは、ナショナルな研究枠組からの越境と学問分野別の研究枠組からの越境である。

東アジア諸地域の文化は、比較的早期にそれぞれの骨格が形成され、大きな断絶を経ないままに今日の国家の枠組みに連続している面がある。その枠組みのなかで研究を精緻化してきた結果、諸文化の多様性は国家・民族の独自性や固有性と安易に重ね合わされ、他文化との交渉の意義を希薄化してきた。しかし、他と断絶して孤立的に形成された文化は存在せず、全ての文化が他者との接触・衝突・変容・融合を今日に至るまで繰り返している。東アジア世界は、多様なレベルでの絶えることのない文化交渉の連鎖によって形成される複合体としてとらえるべきなのである。そして、一国文化主義の見地を離れた文化的複合体としての東アジア像の形成は、「東アジア共同体」の構想が政治課題として浮上している現在こそ、強く要請されているものである。かかる東アジア像は、一国文化を他者から切り離して考察する視角からは獲得できない。相互の文化交渉を動的・多角的にとらえ、アジア文化を総体的にとらえる視角こそが、新たな文化像への最も有望な道程であり、東アジアの文化研究を革新する起爆剤たりうるものである。

ある文化を「総体的」にとらえる視角は、言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野を総合する立場から得られるものである。もちろん個々の研究者はそれぞれが拠って立つ学問領域を有し、そこから東アジアにおける文化交渉に切り込んでいくことになる。たとえば本拠点のメンバーの何人かは、長崎に関わる研究を進めている。その過程で、長崎に現在残る中国風寺院である「唐寺」に存在する道教神の問題が浮上した。同時に、かかる現象が、近世日本における中国への窓であった長崎特有のものではなく、日本の禅宗の名刹にも見られることが指摘され、その説明のためには、日本仏教史・中国宗教史・東アジア交易史など、いくつかの学問分野の総合と越境が有効であることが実感されている。

この二つの越境は、むろん容易なものではない。「東アジア」という一国史的枠組を超えた視点からの研究は、近年活況を帯びており、中国や韓国においても「東アジア」を冠した研究プロジェクトが動き始めてはいる。しかし、日本におけるそのような研究視点の紹介が、他国において必ずしも好意的・肯定的に受け入れられてきたわけではない。また人文学諸分野の研究が、「東アジア」規模での長期・広域の空間を対象として、融合的・学際的・総合的な共同研究を遂行したという経験を、我々は十分に持っているわけでもない。その意味で、本拠点のプログラムは、きわめてチャレンジングなものであることは明かである。

#### 4 東アジア文化交渉学の研究方法

我々の構想する「文化交渉学」が、人文学の一分野として歴史学や言語学などと並立するディシプリンにまで成長するか否かは、現在では未知数といわざるを得ない。かつて宗教学が神学から離陸し、一つのディシプリンとして成立するには一世紀を要したように、非常に長いタイムスパンで考えるべき問題であろう。ただし、当面数年間の研究として、我々は以下の三つの方向性を考えている。

## I 媒介から見た文化交渉の諸相：何が何によって伝わるのか

文化を伝える媒介としては、様々なものを想定できる。また媒介の種類も多様であり複合的である。通常、大きく分けて「人とモノ」が想起されるが、「人」については、外交使節・学者・留学生・僧侶など個人として把握可能なものもあれば、海賊・移民など集団としてとらえるしかないものもある。「モノ」にいたっては、典籍のような文字情報から交易産品まで大きな幅を持つ。さらに媒介の意味を広く取れば、船舶などの交通手段、それを支える交易路、あるいはより広範にとらえれば国際関係など、研究対象はさらに拡大していく。これらを個別に取り上げるだけでは、従来からの事例収集の域を出ないのであって、文化交渉学においては「東アジア」というより大きな場への止揚がつねに意識されねばならない。念のために付言すれば、「個別叙述的」研究成果を否定しているのでは決してない。そのような蓄積がなければ研究は進まない、いや、個別研究の蓄積という形以外には目に見える成果は出しようがないのが現実である。しかしここで確認しておきたいのは、個別のテーマがなぜ設定されたのか、いかなる意味で「東アジアにおける文化交渉」と関わるのかを、予定調和的に期待するのではなく、意識的に明示する必要があるということである。その意識が文化交渉学固有のディシプリンの形成の第一歩であると考えられる。その検証が、拠点の全メンバーが参加する「文化交渉学創生部会」の役割である。

## II 地域における文化接触とその影響

東アジアのなかにある特定の地域を設定し、その地域における文化交渉を他地域との比較を念頭に置きながら研究する方向は、拠点におかれる「地域研究班」が担う役割である。地域研究班は「北東アジア」「沿海アジア」「内陸アジア」「アジア域外」の4研究班を置いている。4班のなかに「中国」を含めなかったのには理由がある。「固定的文化中心」の設定を回避するというのが、本プロジェクトの方針であるが、東アジア文化を対象とする場合に中国文化にどのようなスタンスをとるかは、ある意味で決定的である。各地域における文化接触を研究しようとする、中国文化とどのような関係を取り結んだかという問題は、避けて通ることができない。したがって、各研究班は、当該地域が中国文化とどのように接触し、どのような影響を受けたのか（あるいは受けなかったのか）という視点を共有しながら、東アジアにおける中国文化の位置を探り直すことになる。同時に、各地域が文化的複合体としての東アジアのなかで、いかなる性格を持つものとして位置づけられるかを検討する。そのために各地域研究班は、それぞれが主担する共通研究課題を設定し、他の研究班のメンバーにも適宜参加を求めながら、文化交渉における地域性の検出を進めていくことにしている。たとえば、日本や韓国などを含む北東アジア班は、すでに「東アジアにおける書院」を共通テーマとする研究を開始している。そこでは、中国も含めた東アジアにおける伝統的学術機関としての「書院」の比較研究から、当該地域の文化継承の相違とその背景が抽出されることが予想されている。こうした研究テーマの複合が、東アジアにおける文化交渉の多様性と共時性を浮かび上がらせることにつながるであろう。

## III 他者から見た文化像と文化アイデンティティの形成

この研究方向は、本プログラムがサブタイトルとして掲げた「周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出」と密接に関連する。自画像と他者の手による肖像のギャップ、そして他者の自己認識が

自らの文化的アイデンティティ形成とどのように関係するかは、異文化接触を考える際に必ず表面化する問題である。

従来のアジア文化研究は、日本文化・中国文化など一国の文化の特質とその形成を、あくまで一国の枠内でとらえようとしてきた。対象の本質を把握するために「中心」や「核」に関心を集中させ、中心ならざるもの、すなわち「周縁」を分析対象から剥離して、純化された文化諸相を抽出する方法がとられてきたのである。しかし、他文化との接触は恒常的に生起し、文化接触は切り捨ててきた「周縁」でこそ起こる。一つの文化が他者の目にさらされ、衝突・変容・融合をへて受容・定着するという文化交渉のダイナミズムは、「周縁」を掘り下げることで初めて把握可能となる。また他者の目でとらえ直された文化像は、自画像として純化された文化諸相とは異なった様相を呈するであろうが、それは従来の中心指向の文化研究では見えてこない、ある文化の本質を構成する重要な要素を浮かび上がらせることに他ならない。このように豊かな「周縁」に着目する視角を、本プロジェクトでは「周縁アプローチ」と呼び、文化交渉学を形成するための基礎的方法論と考えている。

意識的に「周縁」の場に立って対象を分析することは、ある文化を東アジア文化のなかに相対的に位置づけることに他ならない。かかる視座に立てば、東アジアの伝統的文化パラダイムに圧倒的な影響力を有したと認識されてきた中国も、文化交渉のハブの一つという位置づけを与えられる。東アジア文化における中国文化の位置をこのように転換することは、アジア文化研究のスキームを大きく変革させることになる。さらに「中心」と「周縁」の関係は流動的であり、かつ複数の「中心」の間に介在するマージナルな地域も「周縁」の1類型であることを考えれば、現実の東アジアの文化は、中国文化とそれに対抗する各国文化の単純な総和ではないことが了解されよう。ここに、多対多の文化接触の連鎖として東アジアをとらえる新しい学の体系としての文化交渉学の基本的視角が得られると考える。本プログラムは、いわゆる「多文化主義」の立場を取るものであり、また個別文化研究の総花的展開を避けながら東アジア文化像の創出をめざすものである。その際に、このテーマは東アジア文化の全体像を描き出す上での「下書き」的役割を果たす可能性がある。

以上、我々が構想する東アジア文化交渉学の概要と研究方向を紹介した。この構想の正否は、究極的には本拠点メンバーの成果にかかっていることは言うまでもない。端緒についたばかりであるが、その一端を最初に発信するのがこの研究紀要である。